

## キャスターという仕事

表題は国谷裕子さんによる岩波新書新刊である。まずは表紙カバー裏の「読者のみなさんへ」から一番組を離れて10カ月が経ち、〈クローズアップ現代〉に自分なりの区切りをつけたいと思いました。私には、次に向かって進むために、番組とともに過ごしてきた時間を整理することが必要だったのです。番組との出会いと別れ、キャスターの仕事とは何かと悩んだ日々、記憶に残るインタビューの数々。そしてテレビの報道番組が抱える難しさと危うさ。偶然のようにしてキャスターになり、大きな挫折も経験し、そのことへのリベンジとしてキャスターをやめられなくなった私。番組を制作する人々の熱い思いに突き動かされながら、様々な問いを出し続けてきました。この本は、言葉の力を信じて、キャスターという仕事とは何かを模索してきた旅の記録です。



雑誌『世界』2016年5月号で国谷さんの心にせまる文章に接したが、本書は肉厚の「旅の記録」である。国谷さんという一人のキャスター、ジャーナリストの苦悩と成長の過程を綴っている。それだけではない。〈クローズアップ現代〉という番組の制作・放送を通じて、この20数年の世界と日本の歩みを振り返ることができる。〈クローズアップ現代〉は、問題関心を高め、狭い知識を広めるうえで大いに役立った。大学の講義にも何回か利用させてもらった。その点で、本書を「自分史」とも重ね合わせて読み進んだ。多くの付せんをつけたが、その一部でも紹介していきたい。

物事を「わかりやすく」して伝えるだけでなく、一見「わかりやすい」ことの裏側にある難しさ、課題の大きさを明らかにして視聴者に提示すること。それこそが〈クローズアップ現代〉の役割なのではないかと思えた。結論をすぐ求めるのではなく、出来れば課題の提起、そしてその課題解決へ向けた多角的な思考のプロセス、課題の持つ深さの理解、解決の方向性の検討、といった流れを一緒に追体験してほしい。そんな思いで私は、番組に、そして視聴者に向き合ってきた気がする。

数々のインタビューを通して、たとえニュースになる発言を引き出せなくても、言葉の重みや表情が語ることもテレビの大きな魅力であることを学んだ。インタビューでは聞き手がどんな質問をするのかが問われていることも実感した。そして、生放送では、最後は自分しか頼れないという覚悟が必要であることも身にしみてわかった。

—続く

(2017年2月15日)